

日本のインフレイタブルボートの現状と可能性

ジョイクラフトを創業して四半世紀以上たちますが、その間、**日本のインフレイタブルボート**をめぐる環境はずいぶん変わりました。なかでも大きな転換点となったのが2003年の小型船舶免許制度の規制緩和です。これにより、登録長3m未満、推進機関の出力が1.5kw（約2馬力）未満の船舶にはボート免許と船舶検査が不要となり、スモールボートが手軽に楽しめるようになりました。その結果、このカテゴリーのユーザー層が一気に増大。インフレイタブルボートにおいても欧米とは異なる日本独特の市場が形成されました。

当社は徹底して2馬力船外機で安全に快適に航走できるインフレイタブルボートを追求。年々改良を重ね、今日では規制緩和当時の4～5馬力搭載モデルよりもよく走る高性能の2馬力モデルを提供するに至っております。そして市場が求めるのは走りだけではありません。使用後も膨らませたままで保管する欧米と違い、わが国では使用後は折りたたんで運搬し屋内に収納する場合がほとんど。軽くてたたみやすい素材の

ボートであることがとても重要です。

ところで、昨今、**熱溶着（ヒートシール）**をウリにするインフレイタブルボートが見られるようになりました。一部で接着剤使用のボートより優れているように語られているようですが、それは大きな誤解です。

そもそもヒートシールは特別な技術ではなく、手間のかからない簡単な施工で良い特長もあります。ただ、あくまで工法のひとつに過ぎず万能でもありません。例えば繊維をサンドイッチした高級ボート布の場合、薄い素材を熱溶着するのは難しく、結果ボートは重くたたみにくくなります。また現在（ごく一部の海外ブランドを除き）熱溶着できるのはチューブのみで、結局底布やトランサムなどの重要な部位は接着剤を使っているのです。

接着剤についてもものにより性能はピンキリ。適切なメンテナンスでヒートシールに劣らぬ耐久性を発揮する接着剤もあります。現に当社には20年前のモデルが修理に持ち込まれることもあります。接合箇所は問題ありません。



水上の“チャリンコ”であってほしい

もちろんジョイクラフトのボートにもヒートシール工法を採用したものはあります。要は適材適所。使用環境や素材、コストなどを総合的に勘案し、そのモデルに最適な工法を選ぶことが重要なのです。

閑話休題、2馬力艇人気で拡大したわが国の市場ですが、まだまだインフレイタブルボートには多くの魅力と可能性が秘められているとジョイクラフトは考えます。例えば、通常は水に浮かべて使用するボートですが、膨らませて庭に置き、船内に水を溜めるとお子さんが喜ぶプールに。こうすればボートはお父さんだけのものではなくなりますね。

また、近年気候変動により、各地で深刻な水害が多発していますが、一家に一艇とまでいかずとも、マンションなど集合住宅一棟に一艇ボートがあれば、身体の不自由な方の避難手段などとして有用でしょう。折りたたんで収納できるインフレイタブルボートは、いざという時の救命艇に最適です（劣化を防ぐため年に2～3回の

充排気は必要）。現に、町内会で避難用にインフレイタブルボートを用意した事例も多々あります。

さらに万が一大きな災害に遭い、公民館や体育館など避難所での生活を余儀なくされるような事態では、ボートに付属のエアフロアを持ち込むと家族が安らげるベースとなります。

災害時の話が多くなってしまい恐縮ですが、小さく折りたたんで収納でき、充気することで人当たりが柔らかく、強大な浮力を持つ乗り物となるインフレイタブルボートには、様々な場面で活用できるポテンシャルが備わっているといえるのではないのでしょうか。

ジョイクラフトは、2馬力のインフレイタブルボートが水上のチャリンコ（自転車）のように親しまれ、世の中に広く普及する未来を目指し、これからもその可能性を追求してまいります。

ジョイクラフト株式会社
代表取締役 郡山紘一

